



資料2 アユチ潟周縁の古墳

(『味美二子山古墳の時代』第3分冊 春日井市・2000年)

## 南区周辺の古墳時代の海岸線と明治の地形図



明治24年測図5万分1図

### ➡ 白毫寺（年魚市潟勝景碑）の位置

- 古墳時代の海岸線の西側は、ほぼ干拓新田地帯で沖積層の土地・・・古代のアユチ潟
- このアユチ潟の湾の周りには熱田社、氷上姉子社があり古墳も多く、古墳時代に尾張を支配した豪族尾張氏の拠点であったと考えられている・・・尾張氏は別姓海部氏で海人的性格があるが、支配地域を広げ開拓者となり（愛智郡）、庄内川右岸の勢力（春部郡）、尾張最北部の勢力（丹羽郡）と提携していく
- 尾張氏の始祖は天火明命（アメノホノアカリノミコト：真清田神社の祭神）で、後の11代乎止与（オトヨ）の子の建稲種（タケイナダネ）は日本武尊（ヤマトタケルノミコト）の東征に同行し、その帰途で遭難する。尊は霊異の示された草薙剣を建稲種の妹の宮酢媛（ミヤズヒメ）に預けて出かけたが、伊吹山の暴神のために遭難する。尊の死後も剣を守っていた宮酢媛は、やがて熱田の地を選んで社を建て神剣を奉納する。宮酢媛は氷上姉子社に祀られる・・・『熱田大神宮縁起』に大和朝廷との関りがみられる
- 第26代継体天皇は越前から出て、即位した後約20年をかけて大和に入るが、この擁立に尾張氏に関わっているとする研究がある。尾張連草香の娘の目子媛（メノコヒメ）は継体天皇の妃となり安閑・宣化両天皇を生む。断夫山古墳は草香あるいは目子媛の墓といわれる。尾張氏は代々熱田大宮司を務めるが平安時代に藤原氏がこれに代わる
- 熱田層が形成する熱田台地は名古屋城-熱田の名古屋台地・桜山台地・笠寺台地に分かれる。笠寺台地は松巨島（まっこしま）と呼ばれ、かつて海に囲まれた島であった記憶が残る
- 熱田台地の中央（精進川の谷）を矢田川が貫流していた時期があり、大曾根層としてその特徴が分かる地層が残っている・・・アユチ潟の部分に矢田川の谷が形成され、氷河期の海面低下の時期にアユチ潟の沖積層が堆積する器ができたのではないか。その後、庄内川により熱田台地が浸食されるなかで、矢田川は現在のように台地の北を西へ向かうようになる

## 富部神社・・・国重要文化財

富部神社は慶長 8 年(1603)、津島神社の「牛頭天王」を勧請したもので、「戸部天王」「蛇毒天王」とも呼ばれている。「牛頭天王」は、神道だけではなく仏教・陰陽道でも厄除けの神として祀られてきたが、明治になり素戔鳴尊を主祭神とした。

清須の城主、松平忠吉（家康四男）は、富部神社に病氣平癒の祈願をしたところ、日ならずして快復したため、その恩頼奉謝のしるしとして慶長 11 年(1606)、本殿・祭文殿を創建し、毎年百石を寄進した。

例年 7 月 16 日には御葭神事（除疫祭・茅の輪くぐり）がおこなわれる。